小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発
（最終年度報告）

附属学校改革専門委員会：（代表）田代高章*、阿部智央**、菅野亨***、川口明子*
*岩手大学教育学部、**岩手大学教育学部附属小学校、***岩手大学大学院教育学研究科

（令和４年３月 14 日受理）

１．本研究の位置付け

本研究は、教育学部の附属学校運営会議の下部組織である附属学校改革専門委員会が所掌する課題に関する研究である。

一つは、岩手大学第三期中期目標の【16】「地域創生の観点に立ち、地域の教育課題を解決することのできる、地域の初等・中等教育機関教員を養成するための実習校としての機能を強化する」と、その下での中期計画【32】「地域創生を担う初等中等教育機関の教員養成実習校として機能するため、教育学部及び教職大学院と連携・協力して実習カリキュラムを開発し導入する。これにあたっては、小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発や教職大学院における実習カリキュラムの確立等を行う」である。

もう一つは、中期目標の【17】「地域のモデル校としての附属学校の機能を強化し、先導的・実験的取組を通じた教育・研究を進め、地域の教育課題に応える」と、その下での中期計画【34】「地域のモデル校として、多様な子どもたちを受け入れ、幼稚園、小学校、中学校という異校種間の接続教育及び一貫教育の在り方や小学校の専科制について調査研究を行う。そのうえで、附属学校の機能を強化するための学級数、入学定員の適正化を図り、教員の適正配置を計画し、実施する」であり、これらを実現するための全学的な位置付けのもとでの研究となっている。

これまで上記の中期目標・中期計画に従い、地域課題の解決にも貢献しうる地域のモデル校としての役割と、地域創生のための附属学校園の機能強化を目指した取組を、学部と附属校園との共同で進めてきている。具体的には、①小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発、②小学校の専科制の在り方について、③異校種間の接続教育及び一貫教育の在り方について、の三つの研究テーマに沿って、附属学校改革専門委員会を中心に具体的な計画の実施に取り組んできた。本稿は、①に関わる６年目の経過報告及び最終報告を行うものである。

２．本研究の内容

（１）研究の背景

本研究は、小規模・複式教育に関する学生・院生への効果的な教育実習カリキュラムの在り方に関する研究である。これまでの成果をもとに、本年度は四つの課題に焦点をあてて取り組んだ。

一つは、学部１年次の「観察実習」（小学校）における複式授業参観の在り方の検討についてである。前年度は、それまでの主免教育実習期間中の３年次学生が実施する授業の参観（９月実施）から、担任の示範授業参観（10 月）へと変更したが、本年度も継続し、参観後のレポートの分析から成果と課題を探ることとする。

二つは、学部４年次学生を対象として開講される「地域教育実習」の改善の検討である。前年度の取組から、学生の実習への満足度は非常に高いが、スケジュールが過密で小規模教育をじっくりと学ぶことができるような見直しが課題として浮かび上がったため、その改善に取り組むこととする。

三つは、学卒教職大学院生１年次の附属小学校における「総合実習」のプログラムの中に複式学級の授業参観を組み入れ、参観後のリフレクションを通して導入の効果を探ることである。

そしてもう一つは、学部３年次の主免実習中における附属小学校複式学級の授業参観及び講話を、他

の実習校（仁王小、緑が丘小）の実習生に体験させる交流実習の検討である。前年度はコロナ架による教育実習の縮小の影響で継続検討となったが、本年度も６月の専門委員会での議論を踏まえて実施は不可能との結論になり、見送りとなった。代わりに、附属小での複式学級配属生の成果を他の実習生にも研究会で共有する等の体制を整備し、複式学級の教育についての知見の深化を図ることとした。

（２）今年度の取組状況

１）観察実習

ア　実施状況

（小主免）

対象：１年次学生　112 名

期日：10 月 21 日（木）または 22 日（金）

＊いずれかの午前に単式学級及び複式学級の授業を計２授業参観

場所：附属小学校

図１　複式授業を参観する学生

（中主免）

対象：１年次学生　41 名

期日：11 月 10 日（水）

＊午前または午後に所属教科及び配属学級の授業を計２授業参観

場所：附属中学校

観察実習は、例年主免校において２日間で実施してきたが、新型コロナウイルス感染症対応のため、昨年度に引き続き１日に短縮しての実施となった。

イ　複式学級授業参観（小主免）後の感想

授業参観後に実習生から提出されたレポートの複式指導に関する記述を（51 名）、ユーザーローカルテキストマイニングツールを使用して分析した（図２、図３）。

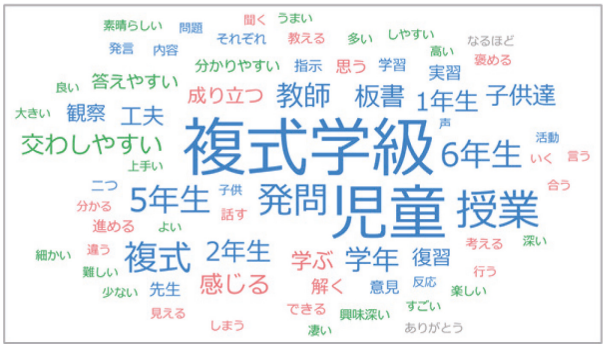

図２　ワードクラウド

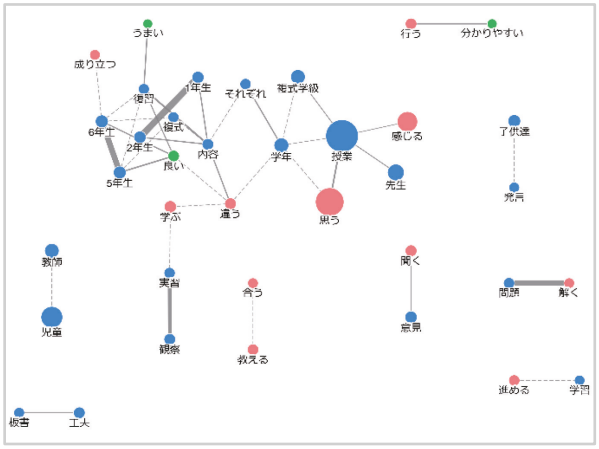

図３　共起キーワード

概観すると、一つの教室空間で異学年の児童が一緒に学ぶ複式授業の様子が興味深く観察されており、一人の教師が異なる授業を並行して進める姿や直接指導と間接指導における教師と児童のかかわり等、複式授業の特徴や２個学年を同時に指導するための工夫について述べられている。また、上学年と下学年の内容を関連させた学びのよさや少人数ならではの利点を捉えている一方で、二つの授業を効率よく進める難しさも感じている。授業中は教師の指導の姿を中心に観察している実習生が多く、「効率よくスピーディに進めなければならない」「異なる単元を同じ時間に教える力や学力の差が大きい子どもたちを教える能力が求められる」「どちらの学年も満足できるような授業展開ができる技術を学びたい」という記述から、複式授業をいかに行うか、指導の様子に関心をもって観察している様子が分かる。

教師の確かな指導を目の当たりにして、「私

もこんな授業をしてみたい」「ここに気が付いたのは凄いねと褒めていたのが印象的で、私も褒めることを意識して児童の自己肯定感を高めていきたい」「児童の表情を見回しながら授業の進み具合をコントロールしていている点を見習いたい」等、教壇に立つ意欲の向上に関する記述も見られ、師範授業の観察の成果と考えられた。

図４　複式授業の様子（5、6 年）

ウ　考察

複式ならではの授業の特徴と共に、２個学年の授業を同時に行う指導の工夫が強く印象に残ったことが読み取れる。主免実習生の授業の参観より、附属小学校教員の示範授業の方が学習効果は大きいことが裏付けられた。

また、観察実習の事前指導として 10 月 5 日に「授業の見方」に関する学部教員の事前講話を実施したが、レポート記述や参観する態度から、実習生が講義内容を踏まえて視点を明確にもってよく観察している姿を捉えることができた。附属小学校の教員からも学ぶ姿勢に対する高い評価が寄せられている。教師の姿、授業計画、板書、児童生徒の姿、教室環境等、３年次の主免実習に向けた学生たちの授業を見る目を鍛えるために、事前講話は重要な役割を果たしていると言える。

２）地域教育実習

ア　実施状況

対象：４年次学生の希望者　27 名

期日：8 月 26 日（木）～27 日（金）

場所：葛巻町内の小学校２校、中学校１校

本年度も１泊２日の日程を組んだが、前年度の過密なスケジュールの見直しという課題を踏まえ、小規模教育をじっくりと学ぶことができるように従来の小学校及び中学校各１日の実習から、小学校コースと中学校コースを設定し、同じ学校で２日間の実習を行うプログラムに変更した。実習に向けて葛巻町教育委員会や実習校３校と連絡を取り合いながら準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症対策に伴う「岩手緊急事態宣言」が発令されたことを受け、直前でやむなく中止の判断に至った。実習は実施できなかったが、事前準備はほぼ完了していたことから、教育委員会と実習校３校に、実習に関する受け止めをアンケート調査により尋ねた。（令和３年 10 月実施）

イ　アンケート調査の結果

質問１）本実習は学生の夏季休業期間に計画し、受入校との調整を経て昨年度は９月下旬、本年度は８月下旬に設定したが、実施時期はいつ頃が適切と考えるか。

回答）８月下旬～９月上旬頃（全）

・この時期は、夏休み明けの２学期始めで行事も少なく、対応が比較的容易である。

・お盆明けに大学で授業を実施後、教材研究の時間が確保されてから実習を行う流れが理想だと感じた。

質問２）昨年度までは実習生が両校種とも経験すべく、小学校１日、中学校１日の計２日間で実施していたが、日程が慌ただしく、児童生徒や先生方と話す時間が十分にとれない等の課題を受けて、本年度は小中コース別とし、実習生が同一校で２日間じっくりと実習を行う内容に変更した。ご意見をお聞かせいただきたい。

回答）本年度の計画が望ましい。（全）

・コース別の同一校での２日間の実習は、地域と共にある学校を実感する上でも有効である。

・２日間で児童や職員の名前を覚えてしっかりと関係性がもてる活動の方が、学生にとってもその後の教職に生かすことができるものになると考える。

・４年次学生の実習であり、かつ教員採用試験

を受験した後の実施であることを考えると、小中コース別の実習が良い。

ウ　考察

いずれの質問の回答も内容は概ね一致しており、教育委員会も実習校も実施時期は８月下旬～９月上旬頃、実習は小中コース別の同一校での２日間が望ましいと考えていることが明らかになった。次年度も、これらの計画を基本として、実施と改善を重ねながら内容の充実を図っていくのがよいと考えられる。

図５　校長講話（令和２年度）

図６　英語の授業体験（令和２年度）

３）総合実習（教職大学院）

ア　実施状況

対象：大学院１年次（学卒）　９名

期日：12 月９日（木）

＊複式学級の１授業を参観

場所：附属小学校

「総合実習」は、教職大学院の学卒１年次の「専門実習」の中に位置付けられており、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で行われている。小学校は附属小学校が実習校に該当しているが、配属学級以外の参観授業の中の一つに複式学級を組み入れ、小規模・複式教育について参観を通して学修する機会を設定した。

イ　参観後に語られた内容

参観後のリフレクションにおける振り返りの中で、院生から次のような感想や気付きが語られた。

・複式授業を初めて参観したが、授業のイメージを掴むことができた。学年が分かれて入れ替わり、学習がしっかりと行われている。
・限られた時間で必要な学習内容を扱うには、教師の力量が必要と感じた。
・５分後、10 分後、15 分後はここまでというように、授業のデザインがしっかりしていないと授業がなかなかできないと思った。
・少人数のためか限定された直接指導の時間の中での子どもの発言が多く、学習意欲が引き出されていた。
・複式指導の様々な特徴を単式の授業に生かせるのではないかと考えた。
・教室掲示が授業の中で生かされるように工夫されている。
・指導の仕方に興味が湧いたので複式の授業を是非やってみたい。

ウ　考察

院生は前期の専攻共通科目「岩手の教育課題」の授業の中で小規模・複式教育について学んでいたが、その折の学修を踏まえつつ、実際の参観を通して複式の特徴への理解を深め、指導の利点や可能性を捉えている様子が分かる。

９名の院生は、所属するコースが小学校、中学校、高等学校と校種が様々で、89%が複式学級や複式授業の参観が初めてだったが、参観を通して大きな刺激を受けている様子が窺える。

３．成果と課題

（１）観察実習について

前年度の研究から、附属小学校教員による示範授業観察の方が、主免実習生の授業観察よりも１年次の学生にとって学習効果が大きいことが推察されたが、本年度の参観レポートからも明らかになった点が成果である。

表１　小規模・複式教育実習カリキュラム

学年	１年次	３年次	４年次	教職大学院１年次
内容			**「副免実習」**（中学校） ＊附属小配属学生 ・２週間（10 月） ・附属小複式授業参観＆講話 ・授業体験（複式学級配属学生）	**「授業：岩手の教育課題」** ～小規模・複式教育～ ＊全院生（前期） ・講義＆附属小複式授業参観
	「観察実習」（小学校） ＊小学校主免の全学生 ・２日間（10 月） ・附属小複式授業参観＆講話	**「主免実習」**（小学校） ＊附属小配属学生 ・４週間（8～9 月） ・附属小複式授業参観＆講話 ・授業体験（複式学級配属学生） ・複式学級配属生の成果を他の実習生も共有できる体制の整備	**「地域教育実習」**（小・中学校） ＊希望する学生（院生可） ・４日間（8～9 月） ・集中講義（1 日）、県内公立小規模校実習（2 泊 3 日） ・小・中コース別の設定 ・葛巻町と宮古市の２市町で実施（令和４年度から）	**「総合実習」**（全校種） ＊授業力コース学卒院生 ・１日（11 月） ・附属小複式授業参観＆講話
関係委員会	教育実習委員会（学部）		教職指導委員会（学部）	専門実習委員会（大学院）

本年度も観察実習は主免実習とは別日程で実施したが、会場となる教室の密をできるだけ避けることを考慮すると、両方の実習を同期間に実施するのは困難であり、今後も別日程で計画することが望ましいと考えられる。観察実習の意義やその時々の状況を踏まえて適切に判断していくことになろう。

（２）地域教育実習について

教育委員会と実習校へのアンケート調査結果から、本年度に改善した小・中コース別実習の方が従来の計画より成果を期待できることが示唆された。また、同一校で２日間の実施となることから、１日目は観察中心、２日目は体験中心のプログラムに組み替えたことも変更点であったが、実習が実施できなかったことから、効果の検証については次年度に取り組むことになる。

参加希望者は 27 名だったが、予定していた２校だけではこの人数の受入れが難しいことが判明し、急遽１校を増やして対応を進めた。希望者全員を受け入れ、宿泊準備も含めて安定した運営をしていくには、受入市町村の拡大が必要である。次年度からは葛巻町に加えて宮古市でも実習を行い、より多くの学生を受け入れられるように体制を整える。

（３）総合実習（教職大学院）について

総合実習の中に複式参観を位置付けたが、複式指導に関する院生の関心は高く、複式指導の特性やメリット、デメリットについて参観を通して具体的に学び取っている様子が明らかになり、参観導入の有効性が確かめられた。今後は、授業者を交えた参観後のリフレクションや院生の授業体験を組み入れた実施が可能か検討したい。

４．本研究の最終まとめ

本稿では、小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発に関する最終年度の取組について報告したが、附属学校改革専門委員会では、これまで検討と試行を繰り返しながら、カリキュラム開発を進めてきた。この２年間は、コロナ禍の影響により、やむを得ず観察実習や地域教育実習を縮小したり、実施を見送ったり等、限られた条件の中での取組となり、十分な検討に至らなかった部分もあったが、小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムは、６年間の最終まとめとして表１のように整理される。

本研究では、附属学校を機能させて教育学部及び教職大学院と連携・協力した小規模・複式教育に関する学生・院生への効果的な教育実習カリキュラムの構築に取り組んだが、附属小学校も附属中学校も小規模校には該当しないことから、これまでの枠組みの中での展開には限界も感じられ、附属学校実習と公立小規模小・中学校実習とを連動させたカリキ

ュラムの創造が求められる。

今後の可能性として、例えば市内の公立校の協力を得て実施している学部２年次の学校体験実習の一部に近隣の小規模校参観が加えられれば、小規模教育の現状への理解が深まり、実習段階における教員としての力量形成に寄与できるであろう。また、岩手の教員に求められる資質・能力を踏まえつつ、小・中学校を所管する教育委員会との共同によるカリキュラム検討を進めることができれば、カリキュラムの一層の発展が期待できるであろう。

これまでの研究の成果を基に、引き続き地域課題の解決への貢献に努めていきたいと考える。

（文責：菅野亨）

参考、引用文献

田代高章，板垣健，菅野亨，川口明子（2021）「小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発」（令和２年度経過報告）．岩手大学教育学部教育実践研究論文集，（8）pp. 130-133.

田代高章，阿部真一，高室敬，加藤佳紹（2020）「小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発」「小学校専科制のあり方について」「小中一貫教育に係る実施改善案の策定」（令和元年度進捗状況報告）．岩手大学教育学部教育実践研究論文集，（7）pp. 99-102.

阿部真一（2019）小規模・複式教育の系統的実践的な学びのカリキュラムー附属小学校と地域の小・中学校との連携を通してー. 令和元年度日本教育大学協会研究集会発表概要集，pp. 110-111.

田代高章，阿部真一（2019）「小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発」（経過報告）．岩手大学教育学部教育実践研究論文集，（6）pp. 145-150.